

# 日本西蔵学会々報投稿用レイアウトのサポート

—— 文系論文用 p<sub>A</sub>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> スタイル・ファイル ——

福田 洋一

2004 年 11 月 6 日

## 1 学会報用のスタイル・ファイル

### (1) はじめに

学会報の執筆要項に沿いながら、学会報への投稿に適したスタイル・ファイルを作成しました。実際の学会報の紙面は、様々な場合に即した細かい処理をする必要がありますが、通常の投稿用にはこのスタイル・ファイルで十分でしょう。もちろん、学会報に限らず、仏教学を中心とした論文にも適したスタイルとなっていると思います。

これは、文系の T<sub>E</sub>X の初心者用に、書式についての細かいことを考えずに論文が書けることを目標とする EasyLayout.sty というスタイル・ファイルの提供する機能の一部です。このスタイル・ファイルはまだ全体としては完成には至ってはいませんし、ドキュメントも不十分です。今回はその中から、学会報のレイアウトに必要なものを中心にご紹介したいと思います。

この EasyLayout.sty は、<http://tibet.que.ne.jp/>で配布しています。

以下、若干の使い方を説明します。

### (2) 自動的に置き換わるコマンド、パラメータの調整

このスタイル・ファイルは、奥村晴彦氏作成の新ドキュメントクラス<sup>(1)</sup>の使用を前提としています。クラスファイルは、jsarticle を指定してください。そのうち、以下の諸項目の定義や値を変更しています。実際には自動的に置き換わるので、特に意識する必要はありません。

1. タイトル、著者名、日付を表示する \maketitle は、jsclass よりも上側の余白を少なくするように設定してある。また、\date{} を省いた場合に、余計な空白ができないようにした。
2. \section、\subsection、\subsubsection のフォントと文字サイズ、表示位置を調整した。
3. \itemize の最初の項目記号を中黒にした。二階層以下は従来通り。
4. ページスタイルの plain と headings を若干変更した。前者はフッターにハイフンに挟んでページ番号を打ち出す。後者はヘッダーにセクション見出しとページ番号を下線を引いて打ち出す。デフォルトは plain である。新設した titleheader、headerfooter レイアウトについては、次項を参照。
5. 注番号の書式を (1) などに変更した。
6. 段落の頭の自動的な字下げはしないように、\parindent は 0 に設定した。字下げをする場合には、自分で全角スペースを挿入する必要がある。

### (3) 新たに追加したコマンド・環境

1. \左右マージン{左マージンの長さ}{右マージンの長さ}。ただし、計算上は正しくても、プリンタによって若干のズレを起こすことがある。そのときには、左右のマージンの値を、両方の合計が同じになるようにして若

干増減をする必要がある。

2. `\上下マージン{上マージンの長さ}{下マージンの長さ}`。この上下マージンは、テキスト領域と用紙端との距離である。ヘッダーやフッターは考慮されていないので、いずれかを指定する場合には、その分テキスト領域に対する余白を多めにとる必要がある。デフォルトでは、学会報とほぼ同じマージンの設定となる。
3. `\subtitle{}` というコマンドで、本タイトルよりもやや小さめのサイズでサブタイトルを打ち出せる。この配布プリントのサブタイトル部分が、そのサンプルである。
4. **インデント**環境を新設。引数として、字下げ幅を全角何文字分かで指定する。
5. **突き出しインデント**環境を新設。引数として、二行目移行の字下げ幅を全角何文字分かで指定する。
6. `titleheader` ページレイアウトの新設。ヘッダーに、著者名とタイトルとページ番号を表示し、下線を引くレイアウト。プリアンブルに`\pagestyle{titleheader}`と指定する。
7. `headerfooter` ページレイアウトの新設。学会報と同じレイアウト。ヘッダーに論文タイトル、フッターにページ番号を出力する。`\pagestyle{headerfooter}`と指定する。
8. **略号表**環境を新設。学会報執筆要項に基づく略号表をサポート。オプション引数に、略号のうち一番長いものをサンプルとして指定する。デフォルトでは、略号の長さは全角3文字分をとってある。略号は`\item[略号]`と入力する。
9. **文献表**環境を新設。学会報執筆要項に基づく文献表をサポート。著者名は`\item`のあとに書く。その後、各文献については、`\Year{年号}{その他の書誌情報}`というマクロで記述する。各項目は、空行を挿入して区切る。
10. 後注は、従来の脚注と同様に本文の中に`\footnote{}`として注内容を書き込み、後注を打ち出したい箇所（原稿の末尾）において、`\後注`という命令を書くことで、通常の学会報と同様の後注を打ち出せる。もし、脚注を使用したい場合には、プリアンブルに`\脚注`と書いておけばよい。注番号の記号などは、デフォルトを変更して、学会報と同じにしている<sup>(2)</sup>。
11. その他、雑多なマクロ。`\tume` は半角分ツメ、`\ake` は半角分アケ、`\ー` は倍角ダース、`\一行空け` で空行一行分挿入するなど。

実は<sup>(3)</sup>、ここでは説明していないいくつかの機能が、この `EasyLayout.sty` には含まれています。このスタイル・ファイルは、文系の論文に特化し、細かい設定をしなくても、できる限り自然な論文の体裁を実現できるように調整したスタイルファイルです。また多くのコマンドを日本語化することで、`TeX` に詳しくなくても、簡単に使えることを目指しています。しかし、まだ十分なドキュメントを用意していないので、ここで全体の説明をすることはできません。今後、さらに改良を加え、ドキュメントを整備していきたいと思ひます。上記 Web サイトで随時アップデート公開したいと思ひます。

同時に、昨年度のこの懇談会で発表した KH 形式のサンスクリット転写をサポートする `KH.sty`、サチューをセクション見出しとして記述できる（目次もできる）`sabcad.sty` も同梱しています。`KH.sty` は `EasyLayout.sty` の中で読み込まれますので、別に`\usepackage{}`で読み込む必要はありません。ただし、スタイルファイルの検索パスの通ったところに入れておいてください。`KH.sty` および `sabcad.sty` の使い方については、きちんとしたドキュメントはまだありませんので、2003 年度の日本西蔵学会コンピュータ利用懇談会での配付資料をお読み下さい。それぞれのスタイル・ファイルにもコメントを記しておきました。

## 2 使用例

### (1) 略号表・文献表

まず、学会報の執筆要項に準拠した略号表と文献表です。これは学会報に限らず、一般的にも合理的な記述方法だと思ひますので、ご利用いただければ、文献表や略号表の書式に頭を悩ませなくてもよくなると思ひます。

## 略号表

- AKBh Vasubandhu. *Abhidharmakoṣabhāṣya*. In *Abhidharmakoṣabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. (Tibetan Sanskrit Works Series 8). Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- LNMB *Las kyi rnam par smin pa'i 'bras bu'i mdo*. Peking No.1004. mDo sna tshogs, shu 285a7–287a5. 『西藏大蔵経』第 39 卷、116–17、鈴木学術財団、1965。

## 文献表

羽田野伯猷

- 1959 「密教者としてのアティーシャ——とくに時輪の問題をめぐって——」『宗教研究』33-1、pp.14–52。
- 1965 「衛へのアティーシャ招請——その背景と歴史的意義——」『チベット・インド学集成』第 3 卷インド篇 I、法蔵館、1987、pp.237–254。

Karmay, Samten G.

- 1975 “A General Introduction to the History and Doctrines of Bon.” *The Memoirs of the Toyo Bunko*. No.33, pp.171–218.
- 1987 「ボン教」前田緑訳、『チベットの言語と文化』長野泰彦・立川武蔵編、冬樹社、pp.364–388。

以上の組版の  $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$  原稿は次のように通りです。俱舎論のタイトルに  $\backslash\text{KH}\{\}$  マクロを使用しています。

```
\begin{略号表}[LNMB]
\item[AKBh] Vasubandhu. \textit{\KH{\^abhidharmakoSabhASya}}. In
  \textit{\KH{\^abhidharmakoSabhASya} of Vasubandhu}. Ed. P. Pradhan. (Tibetan
  Sanskrit Works Series 8). Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
\item[LNMB] \textit{Las kyi rnam par smin pa'i 'bras bu'i mdo}. Peking No.1004. mDo sna
  tshogs, shu 285a7--287a5. 『西藏大蔵経』第 39 卷、116--17、鈴木学術財団、1965.
\end{略号表}

\begin{文献表}
\item 羽田野伯猷

  \Year{1959}{\tume 「密教者としてのアティーシャ——とくに時輪の問題をめぐって——」『宗教研究』33-1、
  pp.14--52。}

  \Year{1965}{\tume 「衛へのアティーシャ招請——その背景と歴史的意義——」『チベット・インド学集成』第
  3 卷インド篇 I、法蔵館、1987、pp.237--254。}

\item Karmay, Samten G.

  \Year{1975}{‘‘A General Introduction to the History and Doctrines of Bon.’’ \textit{The
  Memoirs of the Toyo Bunko}. No.33, pp.171--218.}

  \Year{1987}{\tume 「ボン教」前田緑訳、『チベットの言語と文化』長野泰彦・立川武蔵編、冬樹社、
  pp.364--388。}
\end{文献表}
```

## (2) プリアンブル

以下は、この配布資料のプリアンブル部分および本文の冒頭部分です。

```
\documentclass{jsarticle}
\usepackage{EasyLayout}

\左右マージン{2.2cm}{2.2cm}
\上下マージン{2.7cm}{2.5cm}
%\段落間隔固定
\トンボ
\title{日本西蔵学会々報投稿用スタイル・ファイルのサポート}
\subtitle{文系論文用スタイル EasyLayout.sty}
\author{福田 洋一}
\date{2004 年 11 月 6 日}
\pagestyle{headerfooter}

\begin{document}
\maketitle
\thispagestyle{empty}

\section{学会報用のスタイル・ファイル}
\subsection{はじめに}
```

この中で`\段落間隔固定`命令を使うと、タイトルや著者名など、セクションの見出しなど、引用や箇条書き環境の前後などに挿入される縦方向の空きがなくなり、また全体にわたって文字サイズが一定になります。原稿用紙に近い、`\文字数指定`や`\行数指定`などのコマンドもあります。また`\トンボ`は、B5のページをA4の紙に打ち出すときにトンボ（ただし、 $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2_{\epsilon}}$ のクラスファイルで定義されている`tombow`ではなく、`crop.sty`を使用）を出力するコマンドです。

### (3) 後注

以下に後注を挿入します。コマンドは、本文中では`\footnote{}`だけであり、後注を出力したい箇所で

`\後注`

と書くだけです。

### 注

- (1) <http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/jsclasses/>
- (2) 他に`\注{1}`および`\注本文{1}{注の内容}`というマクロも定義されている。これは`\footnote{}`よりも便利だが、これまで似たような機能のマクロがないので、説明が長くなるため、ここでは使わないことにしておく。
- (3) ここは、インデント環境の例です。`\begin{インデント}{5}`で始まります。